

高得点句 自句自解

九点

②蚊遣火を焚いて真昼のカフェテラス 辻 幸子

このカフェテラスは都筑区仲町台にあるせせらぎ公園に隣接したお店です。公園の中を小川が流れ涼しい風が吹いていましたが、蚊や小さな虫も店内に入ってくるので蚊遣火を焚いていました。店の前をジョギングする人や犬を連れて散歩する人など大勢の人が通って行きます。

七点

①遠花火走らぬ文に向かひをり 荒木ツル子

其の夜、久しぶりに友を思い出し手紙を書いていました。かすかに遠くから花火の音が聞こえて来ました。線香花火で競い合って遊んだ日の事などが脳裏に浮かび、なかなか進みませんでした。

青空を組み合はせたる代田かな 柏尾のり子

横浜から九州への新幹線からの眺めは、ほとんど山と田園風景です。夏の初めには、水の漲られた水田に一面の青空がうつります。美しく四角く区切られた水田もあれば、ジグゾーパズルを組み合わせたような不定形の水田もあり、いつも面白く見えています。

六点

③山滴れり銃声の一度きり 中村 朋子

むかしフランスの田舎で、夏に銃声を聞きました。フランスも猟期は冬。特別な許可を得たものだったのでしうか。意外な気持ちで耳を澄ましました。しかし、次はありませんでした。ただ一度の銃声の長い余韻が、夏の深い緑とともに思い出されます。

①車庫を出る路面電車や原爆忌 中村 朋子

十代を広島で過ごしました。広島は路面電車の町。のどかなチンチン電車は平和な日常のシンボルでした。事実、原爆投下の二日後には運転を再開したとか。その話を聞いて以来、車庫を出発する電車の姿を思い出します。張り切って町へ出てゆく電車、到着を待つ大勢の人々・・・今日という日が、だれにとっても、平和で美しい日となることを祈ります。

五点

②風疾し子の放たれしキャンプ村 増田 守

福島県塙町の子供チャレンジキャンプのために、同地を訪れた。最後の日本兵と言われた小野田寛郎氏が、健全な青少年の育成を目指して始めたものである。同氏は一昨年に亡くなられたが、小野田記念財団の有志者によって続けられている。

国東半島へ旅行した時の一句です。ひねもす麦秋の真中を歩いていました。さわやかな風の中に佇ち、この様な景が浮かびました。

四点

② 藤椅子の父の形のへこみかな

柏尾のりこ

昨年の暮れに九十二歳の父が急逝しました。肺炎を併発し、たった二日の入院でした。高齢とはいえ、前日まではとても元気に日常生活を送っていたので、驚くばかりでした。半年以上経って、やっと現実味を感じているところです。いつもリビングの椅子に座って新聞を読んでいた父を思い出しながら、作った句です。

① 夏霧や牧の牛の背黒光る

藤本 友子

下界では猛暑の七月末、清里高原は爽やかで快適だった。牧場の牛達はのんびりと草を食み、たちこめた霧で背はしつとりと濡れていたという光景です。もちろん新鮮な牛乳でできたソフトクリームをおいしくいただきました。

① 夕立や少し傾斜の駅ホーム

増田 守

電車のホームには傾斜があるという。指摘されなければ解らない程であるが、視覚障害者の転落事故等が報道されたり、注意喚起の放送を繰り返す耳にすると、緊張して杖を握り直す自分がいる。ことに雨の日は。

① 糠床に茄子は茄子紺残しけり

桜井 幸枝

茄子を糠床から取り出した時、其処に残った色と形に、「はっ」とした。塩は控えめ、みょうばんは使っていないので茄子の色は鮮やかでない。自分は、八十有余年生きて来てその足跡もないこんな生き方をして来たのかと。今までも折にふれてその様に感ずることはあったが、つい御座なりに生きて来てしまった。これからも相変わらずそんな日々が過ぎてゆくのかと思うと・・・

ひぐらしの声しみとおる齡かな

藤崎安紀子

毎年、何気に聞いていたひぐらしの声ですが、今年は、自分も夫も身体に不調をきたし、ああやっぱり年をとってしまったなあと思いました。この先の生き方にも不安を覚えている時、聞こえてきたひぐらしの声はとてももの悲しく自分の心を反映しているかのように思えました。